

お茶うけ 第46話

おじいさんの教え

最近の新聞などの論調を見ていると、「父親がもっと家庭にいて、子育てに協力しないから、子供たちは集団生活のルールが守れない」と言っているように感じるがよくあります。すると、私は、いやでも自分が子育ての時期に仕事に追われて、二人の子供が朝目を覚ます前に家を出て、夜寝静まってから帰っていたことを思い出します。今は、毎晩遅く帰宅する息子が、私の孫をあやす様子を嫁が撮したビデオを見て、「僕は親父にあやしてもらったことはなかった」と、孫を羨んでいます。しかし、私自身も父にかまってもらったという記憶はありません。ところが、父は私の息子や娘に対しては会うたびに、それこそ一生懸命に遊んだり、相手になってくれました。これは、孫のほうが可愛いということではなく、私が子供であったころの父は、仕事が忙しくて子供をかまう時間がなかったのだと思い当たりました。そして、私は、知らず知らずのうちに、父が私の子供たちをあやしていた仕種を真似て、孫をあやしている自分に気づきました。

京都で造園業を営む16代目・佐野藤右衛門は、その著書「桜のいのち庭のこころ」の中で、子供のころは、いつもおじいさんと一緒にいて、いろいろな機会に植木職人の心構えなどを教わったと書いています。佐野の家では代々、子供が小さい頃は、その父親は仕事を取り仕切る重要な役目があり、常に不在であったので、おじいさんが孫の守(もり)り役でした。おじいさんは孫に、木や庭について、そのまたおじいさんから教わったことや、新たに自分が会得したことを話し伝えてきたと言います。



「リトル・トリー」という作品は、チェロキー・インディアン(アメリカ先住民族)の血筋を受けたリトル・トリーと呼ばれる5歳の少年が、インディアンのおじいさんとおばあさんと一緒に暮らしながら、人としての生き方を身につけていく物語です。一つのエピソードを紹介します。

おじいさんとリトル・トリーは、生活費を稼ぐために、月に一度、商売品(自作のウイスキー)を担いで、長い道のりを歩いて町まで売りに行きます。おばあさんは売上の中から5セントをお駄賃としてリトル・トリーの壺に入れてくれます。ある日、商売品を売りに町に行くと、辻店が立って賑わっていました。リトル・トリーは、壺から出してきた全財産の50セントをポケットの中で握りしめていました。今日は、このお金で今度のクリスマスにおばあさんにプレゼントする綺麗な模様のついた赤い箱を買うつもりです。

そこに、おとなしい子牛を引いた男がきました。子牛は、リトル・トリーが背なかをなでて頭を上げようとせず、ただ立っているだけです。リトル・トリーが興味を示したのを目ざとく見つけた男は、言葉巧みにリトル・トリーに言い寄り、本当はもっと高いのだが、子牛もおまえが好きなのだから特におまけすると言って、50セントで売ってくれます。リトル・トリーは大喜びで家路につきますが、よるめきながら歩いていた子牛は、ついに途中で倒れて死んでしまいます。おじいさんが、ナイフで腹を裂いて肝臓を取り出すと、黒いシミがありました。子牛は病気だったのです。おじいさんは、子牛の皮をはぎ取り、おばあさんに渡せば何かの役に立つだろうと言います。

夕食の席で、おじいさんは、「なあ、リトル・トリー。おまえの好きなようにやらせてみせる、それしかお前に教える方法はなかった。もしも子牛を買うのをわしが止めさせていたら、おまえは何時までもそのことをくやしがるはずじゃ。逆に、買えとすすめていたら、子牛が死んだのをわしのせいにしたじゃろう。おまえは自分でさどっていきかないんじゃよ」と話します。リトル・トリーは、全財産を失った代わりに、用心して人を見分けることの大切さを学んだのでした。

上記の2人のおじいさんも、世間一般のおじいさんたちも、孫たちに期待するのは、「人としてのあるべき姿、品位」であると思います。今大切なのは、父親が家庭に早く帰るかどうかではなくて、子供たちに生きていく上での基本となる心の持ち方を、身近な人達が真剣に教えることであると思います。

以上

参考資料:

- 「桜のいのち庭のこころ」 佐野藤右衛門著 草思社刊 (1998年)
- 「リトル・トリー」 フォレスト・カーター著 和田寛男訳 めるくまーる社刊 (1991年)

この「リトル・トリー」は、子供から大人にまで年齢を越えて、読む人に感動を与える物語です。アメリカでは、あの「ハックルベリー・フィンの冒険」と同様に、この本も永く読みつがれるであろうと、高く評価されています。